子規全集

第十六巻　俳句選集

講談社

N. D. C. 910　664 p　20 cm

子規全集　第十六卷
俳句選集

定價　參阡六百圓
昭和五十年八月十八日　第一刷發行

編　者　正岡子規
代編集表　正岡忠三郎
發行者　野間省一
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽二―一二―二一
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
郵便番號　一一二　振替　東京三九三〇

印刷所　株式會社　精興社
製本所　大製株式會社
本文用紙　三菱製紙株式會社
©正岡忠三郎　一九七五年
落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

0395-417165-2253(0)（子規）　Printed in Japan

俳句選集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

目次

俳句　二葉集　春の部……五
承露盤……二一
新俳句……二三五
春夏秋冬……三八七
案山子集……四九七
刪正本　増補再版　獺祭書屋俳話附録選句集……五六三
參考資料……五七七
解題　池上浩山人……六一七
解説　ぬやま・ひろし……六三九

小日本叢書

俳句 二葉集 春の部

明治二十七年五月三十日
「小日本」第八十六號 附錄

編注

子規の主宰した新聞「小日本」で募集した俳句から選ばれた子規の最初の俳句選集。収載作者一〇〇人、句數四三五句、假綴菊半截判三二頁の小册子で「小日本」附錄として刊行された。日本派の俳句革新運動の先鞭をつけた選句集として價値が高い。春の部以降は編纂されなかつた。

俳句二葉集　春の部　目次

元日　九頁
初日
傀儡師
正月
二月
三月
彼岸
出代
畑打
涅槃
凧
餘寒
爐塞
雛
長閑　一〇
日永　一〇
春夕
春夜
行春　一一
東風
春風
春雪
雪解
霞
陽炎　一三
春月
春雨
燕　一四
春田
水ぬるむ　一三
春田代
春野　一三
焼野
春川
春水
春海
汐干
彌生山
春山
猫の戀
鹿落角
鶯
田螺
蛤
雉
雲雀
歸雁
雀子　一四
鳥交る
若鮎
白魚
飯鮹
蛇穴を出づ　一五
蝶
虻
蠶
蛙
梅
紅梅　一六
柳

木の芽 一七
椿 ・
初櫻 ・
櫻 ・
朝櫻 一八
夕櫻 ・
夜櫻 ・
櫻散る ・
遲櫻 ・
桃花 ・
李花 ・
連翹 ・
海棠 ・
躑躅 ・
若菜 ・
芹 ・
薺 ・

薺の花 一九
草萠 ・
若草 ・
干大根 ・
蕗の薹 ・
蕨 ・
土筆 ・
虎杖 ・
蘆芽 ・
菊根分 ・
山吹 ・
菫 ・
花大根 ・
菜花 ・
青麥 ・
藤 ・
春雜 ・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

俳句二葉集

春の部

元日　元日やなげしに古き桑の弧　古學
初日　出たり〳〵海一ぱいの大初日　桂月
傀儡師　木屋町や雨夜にもどる傀儡師　桃雨
正月　あらをしや早正月も三日立つ　藪鶯
二月　御手洗の氷をすてる二月かな　松宇
鶯の口元寒き二月かな　烟霞郎
梅檀のほろ〳〵落つる二月かな　子規
茨焼て蛇寒き二月かな　虚子
町中に牛の寐て居る二月かな　二香
三月　三月や足場かけたる藏屋敷　鬼佛
彼岸　ほろ〳〵と椿こほるゝ彼岸かな　子規
出代　出代の在所へ下る夜船かな　狙醉
畑打　畑打の留守とは見えて牛の聲　小洞
畑打の一日捨てたる我家かな　素香
子を負てひとり畑打つやもめかな　子規
むさし野や畑打ち廣げ〳〵　子規
畑打つや大閣様も死だげな　紫影
畑打の親子もどるや岨の月　明庵
畑打て戻る潮來の小舟かな　狙醉
春日野や太郎次郎の畑打つ　女月
涅槃像起しもならぬ大きさよ　藪鶯
涅槃　乞食の死あはせたり涅槃像　松宇
凧　切凧や富士の裾野を低う飛ぶ　五洲
凧一番星のとなりかな　可全
夕風や糸ありたけの凧晨風　切れ凧やくるり〳〵と雲の中　嵐翠

無常　三句

此春は凧とばしたる人もなし　鳴雪
きれ凧のきれて歸らぬ行へかな　子規
大凧の骨ばら〳〵にばら〳〵に　飄亭
餘寒　俎板に餘寒の海鼠上りけり　酒竹
曉の水まだ氷る餘寒かな　烟霞郎
釣り下げる鰤の頭の餘寒かな　千里
爐塞　爐塞いで此夕暮を如何ん　僧虚子
雛　古雛や壁にさしたる影法師　桃雨

雛

裏店の雛物語小雨ふる　飄亭

長閑

長閑さや南京町の子守歌　飄亭

長閑さやどの穴見ても蟹は留守　半狂

長閑さや牛の角文字涎文字　てつ

長閑さや五日の月に女牛啼く　半二

麗かや瀬田の唐橋牛渡る　玉川

永き日や花の初瀬の堂めぐり　鳴雪

永き日や伐り出だす木曾の檜の日永かな　同

暮遅し山を斜めに日の落ちぬ　藪鶯

暮遅き波のうねりや須磨の浦　松宇

掛茶屋に團子ならべる日永かな　六鼠

永き日の滋賀の山越え湖見えて　子規

永き日や床几の端に十二文　酒竹

永き日の洛陽に入りてくれにけり　古白

繪馬堂に繪馬見る人の日永かな　鬼佛

鶏の築地をくづす日永かな　虚子

永き日を藥種ゑたる野寺かな　狙醉

兀山に永き日脚の傾きぬ　殘香

永き日や島人眠る丸木船　北翠

永き日や東海道の道普請　松汀

雛鶴の首伸ばしたる日永かな　振山

永き日や釣鐘廻る蜂一つ　欣嶺

何處へ往て來たぞ日永の夕鴉　柳蛙

鳩眠る觀音堂の日永かな　柳堂

永き日の鎭守の森に殘りけり　花月

子鼠の供物引き行く日永かな　任評

永き日の茶臼ひき〳〵人眠る　百山

五十年其一日の日永かな　畫風

祖師像の箔塗りかへる日永かな　茂句念

飴賣の裏道通る日永かな　半二

春夕

瑞籬や狐子を生む春の夕　鳴雪

春の夕稻荷へ參る官女あり　古洲

金殿に灯ともす春の夕かな　虚子

春の夕暮れんとしては小雨ふる　同

春夜

春の夜の鞦つくろふ女かな　鳴雪

春の夜の人つどひけり淺草寺　飄亭

春の夜や衣桁に下る蜘の糸　狙醉

春の夜や重ねかけたる緋の袴　子規

王子松宇亭

春の夜の稻荷に隣るともしかな　子規

朧月落花とく〳〵の水聲聞くが如く聞かざるがごとし

行春

春の夜を遠き昔にしたりける　霽月
行く春を烏鳴くなり女人堂　鳴雪
すりへらしけりな暮春の旅硯　松宇
唐人の島原通る春のくれ　古洲
行く春や鶴梁が妻の糸白し　烟霞郎
菅笠の同行二人春くれぬ　同
紅筆のしどろになりて春くれぬ　飄亭
大名の行列春をおくりけり　可全
行く春や三千の宮女怨みあり　虚子
行く春や琴の覆ひの古錦　童顔
三吉野も淺黄に暮れて春の行く　錦溪
行く春や嵯峨野を返す御所車　寒月
行く春や遊女來て泣く祇王寺　暉吟

東風

辨天のやしろは東風の眞向かな　桃雨

春風

大佛の鼻毛を吹きぬ春の風　松宇
春風や牧童倒まに牛に乘る　古洲
春風や寺は黄檗書は隱元　同
春風や爺は山へ柴刈りに　五洲
薄絹に鴛鴦縫ふや春の風　子規
春風や茶屋の女の一重帶　烟霞郎
春風や赤前垂が出て招く　飄亭
春風や鳩舞ひ上る人の中　同
春風や安房の鷗の浮いて來る　同
春風や馬の尻行く麥畠　鬼佛
春風や上り帆むる〻燧灘　同
春風や道標元祿四年なり　碧梧桐
春風やい組ろ組の伊勢詣　鳥寸
岡低し松原長し春の風　鼠骨
新羅から貢の船や春の風　柳堂
春風や牛に乘つたる京女　驢村
春風や京の舞子の美しき　墨水
大寺や疊の上の春の風　魯洲

春雪

春の雪はらり〳〵とはねる笹　猿男

雪解

雪解や小川の中の二流れ　秀吉
里の子の馬糞爭ふ霞かな　得中

霞

霞む日に大鋸の目立かな　桃雨
千石の帆を下したる霞かな　五洲
遠霞湖東の彌生山丸し　同

霞

大津畫やかすむ湖水の七小町　碧梧桐
かすむ日やぽんと一本山の松　醒梅
大寺も小寺もかすむ夕かな　其南
女づれ霞の宿につきにけり　鳥寸
霞みけり比枝の大杉鳥羽の松　狙醉
霞からこほれて白し鳥の糞　佐竹
山の畠寐て居る牛のかすみけり　鶯歌
霞めるや車大路を牛の聲　寒月
牛追の次第にかすむ峠かな　鍬錆
裏山に霞殘りて暮れにけり　失名

陽炎

陽炎に牛の皮剝ぐ河原かな　鳴雪
鏡とぐ手に陽炎のもゆるかな　桃雨
陽炎のもゆる干潟の碇かな　同
陽炎や買ひ殘されし馬の骨　爛腸
陽炎や大盤梯の雪に立つ　明庵
掃溜の陽炎になる晝下り　同
陽炎の笠がよう似た清十郎笠　飄亭
千人の陽炎立つや橋の上　同
掃溜や陽炎遊ぶ古草履　鬼佛
陽炎やふり〳〵馬の尾にも立つ　碧梧桐
屠所の牛陽炎吐て眠りけり　可默

狂女の圖に題す

扇裂く手に陽炎の亂れけり　牛伴

春月

朧月千人斬のうはさかな　鳴雪
春の月裸にしたき姿かな　桃雨
舞殿の左手に出たり春の月　孤松
我戀の朧月夜となりにけり　古洲
山の端やはなれてかすむ春の月　烟霞郎
鹽竈や狂女死ぬ夜の朧月　虛子
古市の町の古さよ朧月　石出
牛引て須摩をもどるや春の月　幽香

春雨

春雨や棧橋あがる蛇目傘　得中
春雨の築地にとまる鴉かな　子規
春雨や小鍋の中に田螺鳴く　紫影
なか〳〵に煙とならで春の雨　爛腸
春雨やひとりぬれつゝ歌が濱　明庵
春雨の野宮の大鼓たそがるゝ　飄亭
春雨の貴船に參る女かな　虛子
春雨の泥川上る田舟かな　同
金屏の灯靜かなり春の雨　同

牛鳴て東郊春の雨晴れぬ　狙酔
春雨やひとり徒然草を讀む　波静
明寺や壁のくづるゝ春の雨　松華

水ぬるむ
水ぬるみ草青み駒ところ〳〵　霽月

春田
雨をよぶ春田のくろの鴉かな　子規

苗代
子鴉や苗代水の羽つくろひ　鳴雪
苗代に夕風わたる緑かな　同

春野
春の野やこれより東成田道　五洲
春の野や何に人行き人歸る　子規
春の野や牝牛牡牛の物語り　女月

焼野
烏啼く雨の焼野を煙這ふ　明庵

春川
烏帽子着て渡る禰宜あり春の川　漱石
春の川末はかすみてうねりけり　碧梧桐

春水
春の川この曲りあの曲りかな　馬良
お堀より流れて出たり春の水　孤松
春の水一の廓の木陰より　鬼佛
木屋町や裏を流るゝ春の水　碧梧桐
上京や友禪洗ふ春の水　同
春の水一枚石をくゞりけり　鼠骨
春の水南無不動尊に碎けゝり　同

春の水二條の橋の夜明かな　鼠骨
草蔭や何をさゞめく春の水　苔古堂

春海
大船のゆたのたゆたや春の海　紫影
春の海漢織吳織を載せて來る　明庵
人すまぬ島もありけり春の海　虚子

汐干
人ちらほら濱は七里の汐干かな　鳴雪
少女子や汐干の蟹にはさまるゝ　古洲
夕暮の汐干さびしやうつせ貝　虚子
親船の底に火を焚く汐干かな　振山

彌生山
大佛の夕榮淋し彌生山　酒竹

春山
春の山入りにし人のあと戀し　鳴雪
賤か戀春の裏山道つけぬ　飄亭

猫の戀
のら猫の野に戀するぞ哀れなる　松宇
氣短くこがるゝ聲や猫の戀　静堂
猫の戀曉の雨さめ〳〵と　碧梧桐

鹿落角
垣くゞる鹿に角なし東大寺　おてつ

鶯
鶯の静かに鳴いて智恩院　素香
鶯の雜木の中の初音かな　桃雨
鶯の聲まだほそき芽獨活かな　孤松
うく〈ひ〉すや枯木の中の一軒家　子規

鶯

鶯の梅嶋村に笠買はん　子規
うくひすの啼く時頬のふくれけり　酒竹
鶯の侍町を啼く音かな　霽月
鶯や藪をながるゝ京の水　非風
谷の雪鶯わたるあちこちと　碧梧桐
うくひすの咽にさし込む朝日かな　護山
鶯を見失ひけり竹の中　馬良
鶯や來はじめてより朝な〳〵　失名

燕

初音町に移りたる洒竹の新居にて

鶯や藪蕎麥までは二三町　正味
乙鳥の竿にならんで小雨ふる　藪鶯
燕や傾城町の長暖簾　得中
酒藏の夕日にならぶ燕かな　素香
槍の柄に燕巣をくふ承塵かな　李坪
大橋の長さをはかる燕かな　子規
行列の槍ふりたてゝ燕かな　可全
燕や川のなかばでひるがへる　證專
淺草の人中くゞる乙鳥かな　半狂
練兵の筒先をとぶ乙鳥かな　廉齋
柳あり河岸筋早き燕かな　失名

雲雀

子雲雀の比叡山おろし立ちかぬる　鳴雪
揚雲雀一本杉のあたまかな　紫影
橋守が小屋の裏から揚雲雀　可全
鳴くや雲雀五山の空に唯一つ　古白
長橋や夕日の雲雀舞ひ上る　虛子
揚雲雀茶畠よりもついと立つ　墨水
遠近に雉鳴き立つる夕日かな　藪鶯
地震て雉鳴き立ちぬ處〳〵　松宇
山道や人去つて雉あらはるゝ　子規
雉なくや我身を知らぬ占者　可全

雉

歸雁

行く雁の三つ四つ二つ湖の上　碧梧桐
廣澤の池の月夜や雁歸る　鼠骨
順禮や草加あたりを歸る雁　虛子
雀子や走りなれたる鬼瓦　鳴雪
竹樣や來つゝなれにし雀の子　得中
雀子の飛びつかれたる茨かな　虛子

雀子

牛の背に雀の交る日向かな　李坪
若鮎のそれほど水は早からず　鳴雪
白魚や月の川尻上り來る　飄亭
飯鮹の大地をつかんで死ぬるかな　子規

鳥交る
若鮎
白魚
飯鮹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.